関節リウマチ患者における薬剤の理解度

奈良県立医科大学附属病院
認定看護管理者　登録リウマチ看護師
西浦聡子

平成28年度健康政策医学講座サマーセミナー
2016年8月23日
奈良県医師会館

背景

関節リウマチの薬物治療において、
中止しなければならない場合に適切な行動がとれていないと、重篤な副作用が出現する。

目的

- 市民公開講座で、薬剤使用方法について適切に対処行動がとれているか調査する。

方法

調査方法：アンケート調査
調査対象：2015年奈良市で開催されたリウマチ市民公開講座に参加された市民の中から、リウマチ患者自身と回答した人
調査項目：年齢・罹病期間・使用薬剤・風邪を引いた時の対応・薬剤を中止しなければいけない場合を知っているか

- 分析方法

薬剤の使用方法について
風邪を引いた時の対応

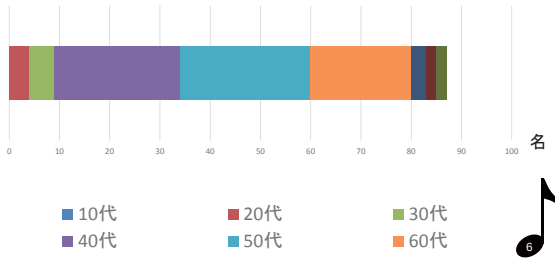
適切な対応
1、診察まで中止している
2、症状が落ち着くまで中止している
3、相談してから決定する

不適切な対応
4、中止せず継続している

2群間において年齢・罹病期間はコクラン・アミテージ検定
性別・薬剤の使用状況はχ2乗検定

結果

- アンケート回収　86名（リウマチ患者121名中）
- 性別　男性　8名（9%）　女性　76名（88%）
  未回答2名
- 年齢



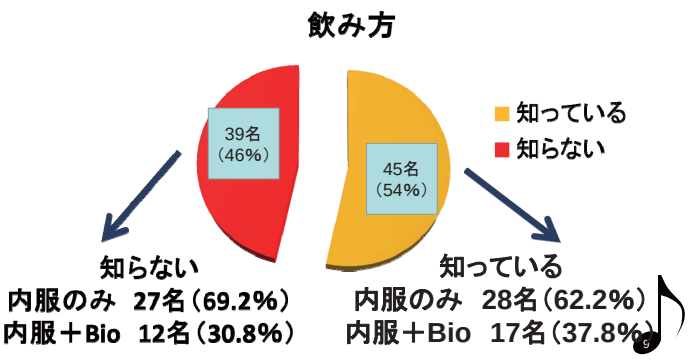
風邪をひいた時の対応

		適切な対応(%)	不適切な対応(%)	P値
年齢	20代	0	3.4	0.62
	30代	5.5	3.4	
	40代	5.5	6.9	
	50代	34.5	20.7	
	60代	27.3	37.9	
	70代	27.3	17.2	
	80代以上	0	10.3	
性別	男性	10.7	8.9	1.00
	女性	89.3	91.1	
罹病期間	1年未満	17.5	13.8	0.70
	1～5年	36.8	27.6	
	6～10年	19.3	31	
	11～20年	12.3	20.1	
	21年以上	14	6.9	
Bio使用	有	43.6	82.8	0.03
	無	56.3	17.2	

①適切・不適切な対応の2群間で、罹病期間に有意差はなかった。

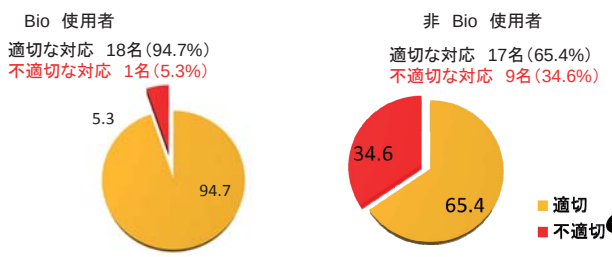
②生物学的製剤の使用者のほうが適切な対応が有意にできていた。

薬剤を中止しなければならない場合を知っているか



薬剤を中止しなければいけない場合を知っているか

知ってる　45名（54%）



わからない　39名（46%）

非Bio使用者　27名（69.2%）
Bio使用者　12名（30.8%）

③対応を知っていると答えた患者でも適切な対応ができていない患者が10名（22%）いた。

結果

①適切な対応・不適切な対応の2群間で、罹病期間に有意差はなかった

②生物学的製剤の使用者のほうが適切な対応が有意に高かった。

③対応を理解できていると答えた患者の中でも適切な対応できていない患者が22%いた

考察

①生物学的製剤併用患者の方が導入時や自己注射指導時に、医師・看護師からの内服も含めた説明や指導がされることが多いため理解が良いと推察される。

②薬剤使用方法の正確な理解ができているかを判断するのは困難を極めると考えられる。今後は、導入時など正確な情報が理解できるような説明が必要。

結論

①生物学的製剤併用患者は薬剤の使用方法について適切な対応ができていることが多い

②今後は生物学的製剤非使用患者に対しての服薬指導の介入について検討する必要がある。

③現在通院中の患者の中で、薬剤指導の必要な患者を選別する必要がある。